

## 維摩經サンスクリット本発見で見直される 支謙訳の意義

研究員 西野 翠

「般若経」に次ぐ最古の大乗經典の一つである「維摩経」(*Vimalakīrtinīdeśa* 「ヴィマラキールティの説示」)は『大智度論』『大乘集菩薩学論』をはじめとするインドの論書にもしばしば引用されており、大乘教理を説く經典としての水準の高さがうかがわれる。また、同経が中国に渡ってから如何に尊ばれたかは、その翻訳回数や注釈書の数から明らかといえるが、日本においても聖徳太子以来、非常に重んじられたことは周知のとおりである。

過去の維摩経研究者は「その梵語原典がすでに失われていること」を嘆きつつ、「梵語原典の直訳態と考えられる蔵訳を精査しつつ、現存する三漢訳(支謙、羅什、玄奘)を厳密に比較対照し、それらの研究から経の原形(original form)」を求めようと、蔵漢対照の研究に力を入れてきた。そうした研究の結果として、三漢訳の特質について以下のような評価がなされてきた。

- ・ 支謙訳は、老莊思想の用語が多く取り入れられ中国の変容が見られる。
- ・ 羅什訳は、訳文が簡略で意味がよく通じ、しかも文藻に勝れ、中国で最も流行した。
- ・ 玄奘訳は、サンスクリット原文に忠実な直訳スタイル

で、チベットとよく合う。

しかし、梵本が出現した現在、梵蔵漢で比較対照すると、実際には支謙訳のみが梵本と一致する例も少なくない。梵本の形成時期と内容が支謙訳と近いかどうかは今後の研究を待たなければならないが、現存する三漢訳のうち最古であり、原形に最も近い位置にある支謙訳を梵本との比較において見直す必要があることは言を俟たない。

まず、訳者の經典解釈を象徴的に表わしていると思われる経題と章題のいくつかについて、梵本との対照により三漢訳の特徴をみた。経題の *Vimalakīrtinīdeśa* (文字通りには「汚れを離れたと名声高いものの説示」の意)だが、支謙『仏説維摩詰経』、羅什『維摩詰所説経』とあり、これも *vimalakīrti*-を音訳している。ただ、支謙は旧来どおり「仏説」の二字を冠し「維摩詰の所説」ではなくなっている。玄奘訳は *vimalakīrti*-を意訳し『説無垢称経』とあり「仏説」は冠していない。三漢訳いずれにも梵本には無い *sūtra* (経) の字が加えられているが、四書五経の国で主流的ランクに定まっている「経」の字を加え「仏教経典」の権威付けをしたものであろう。

第一章の題は *Buddhaketrapaisuddhinīdanaparivartan* *prathamah* で文字通りの意味は「仏国土清浄の由来の章第一」だが、支謙と羅什は「仏国品第一」と簡略化し、玄奘訳は「序品第一」と原題が大幅に変わっている。この章題の訳を見ても、玄奘訳は必ずしも原文に忠実とはいえ

まい。(ほかに第二、四、六章のタイトルについても三漢訳の比較を紹介した。)

また、梵本出現前における三漢訳に対する見方を覆す例をいくつか挙げ考察を加えた。例えば第6章1節の「衆生の非存在」を表わす喩えの一つに、*tadyathā ... paṇḍakasyeन्द्रियास्य प्रादुर्भावāḥ, evaṃ bodhisatvena sarvasatvāḥ pratyavekṣitavyāḥ* / (例えば去勢者の陽根の勃起のように、菩薩は一切衆生を見るである)とあるが、支謙「如蟲蚤之根自然」、羅什「欠」、玄奘「半折迦の根に勢用あるを觀じ」となっている。玄奘訳には一般に意訳が多いが、ここでは宦官 *paṇḍaka* が「半折迦」と音訳され、權勢を誇る宦官に非礼を犯す危険を回避している。羅什はあっさりこの句を省いている。支謙は比喩的表現によって原文の意を表わしている。この一文からも三漢訳の特徴の一端がうかがえる。